

黒い津波 東日本大震災に

御庄博実

土煙をあげて押し寄せる海
真黒い波 真黒い海 真黒い泥土
時速四十キロに近いという
十メートルを超える黒い波が
手向かうものは 家であれ 船であれ かべであれ
倒し 持ち上げ 転がし 呑み込み 踏みつぶして
一気に押し寄せてくる

わたしは両面に向かって声もない
昨日まであった家族の団らん 人びとのざわめき
家々の夕餉 人びとの喧騒
声をあげるいとまもない
真黒い海がすべてを飲み込んでゆく
土煙を上げて 押し寄せ すべてをなめつくし廃墟に
した
わたしには一九四五年八月六日の広島に重なる

巨大なキノコ雲のしたで
土煙が大波のように広島中に広がっていった
投下幾十秒かをかたずをのんで数えた 原爆爆裂
の瞬間
白光に包まれて 機体が大きく揺らいだ
広がってゆく爆裂の波
土煙をあげて家々を呑み込み 広がった火煙
「ああ 何とということをしたのだ」と思った と
エノラゲイの副機長・ロバート・ルイス大尉は
神に祈った という

土煙をあげて街路を走り
川を超え 電柱を倒し 家々を呑みこんでゆく
わずかに曲がった鉄骨が残る瓦礫の街
エノラゲイからの原爆爆裂の土煙をあげて広がる波紋
黒い潮の土煙のすさまじさに 広島に記憶が重なった
僕はテレビの前で凍った

詩集『川岸の道』(思潮社)より

朝の庭

高田千尋

朝の庭に影が横切り
ナンテンの実が色づいている
新聞受けを開きながら
空を見上げると鮮やかな雲

屋根の端にスズメたち
茶色い頭を傾げては
風の匂いを嗅いでいる
柔らかい空にスズメは飛んで

新聞紙を取り出したまま
私もしばらく耳を傾ける
朝日を受けた白壁を
スズメが横切る
白壁は黙って存る

私は在るのか
見ている私は在る
言葉は在るのか
言葉は在る
だが言葉がなくても
すべて物は在る

スズメの星座を思い浮かべる
牛飼座の近くがいいかな
しばらく目をつぶって
スズメのさえずりを聞いてい

詩集『冬に』(本多企画)より